

02・お菓子とお手紙

SE1 ..学校の廊下の環境音
【トラック1のSE1と同じ音】

【頭から最後まで流す】

【0~3秒ほどまで流してSE2と重ねる】

【ごく小さな音で、トラック終了までずっと流す】

SE2 ..クラウディアの足音

【頭から流す】

【0~5秒ほどまで流して止まり、セリフ】

『01・共犯の関係』から約半年後。

冬の、ある月曜日の休み時間。

クラウディア、今日は何が何でも主人公に会いたい。

なので、統計から割り出した主人公の出現予測ポイントまで肅々と移動している。

01の時とは違い、その足取りは明るく軽い……はずだったのだが、実際は暗く重い。今朝『主人公が昨日、男性と街を歩いていた』という噂を耳にしたからである。

この半年で、主人公とクラウディアはすっかり親しくなった。

きっかけは、01の直後、クラウディアがお礼として主人公にお菓子を贈った事である。だが、クラウディアはきっとこれっきりだらうと思つていた。

自分たちは、国語の授業以外には特に接点がないからである。

しかし、その後も主人公は頻繁に話しかけてくれるようになつた。

そのうち二人は音楽や本の趣味が合う事に気づき、仲良くなつたのである。

というか、主人公は話題が豊富である。

ある程度、誰にでも合わせられる気がする。

それからクラウディアは、最初こそ主人公を『典型的な陽キヤ』と思つていたが、どうやら違うようだ。

『明るく親しみやすいオタク』というのが正解らしい。

主人公は相手の話をよく聞き、細かな点までよく覚えている。それから、よく知らない話題も、興味深そうに聞いてくれる。

さらに、質問の仕方がうまいので、相手はつい色々教えたくなるのだ。

これによつて、人付き合いが苦手なクラウディアまで、主人公といる時はおしゃべりになつてしまふ。

そして、クラウディアは『なるほど、だから先生は人気があつたのか……』と理解したのだつた。

それでも、先生とは、難癖をつけられる生き物である。

よつて、主人公の生徒からの評価は完璧とは言えない。批判的な態度をとる子もいる。だが同時に、コアなファンがいるのも事実である。

……たとえば、クラウディアとか。

そう。クラウディアはこの半年で、すっかり主人公の事が好きになつてしまつた。

というか、あのプールの日からもうダメ。

あんなの好きにならないはずがない！　と思つている。

それでも最初は『これは恋愛感情ではない』と必死に否定しようとした。

なぜならこの恋は、どこを取つても、あまりにも脈がない。

認めるだけで、いばらの道になるからである。

でも、それでもダメだった。

校内で見かけるだけでときめいてしまい、話しかけられるだけで心臓が飛び出しそう。気が付けばいつも主人公の事を考えていて、毎晩明日の準備をしながら『時間割全部国語にならないかな……』と思つてている。

学校に来ればずっと、一回、一瞬でいいからと、主人公と接触できる機会を伺つている。このところは何かにつけ『お礼』と称して手作りのお菓子を贈つてしているのだが、前回はそれに簡単な手紙もつけてみた。……返事はなかつたけど。

いいのだ。返事がないのはいい。

別に約束している訳ではないのだし、そもそも大した事を書いていない。
だからいい。いいのだ……。

とにかく、クラウディアはそんな半年を過ごした結果、今では足音だけで主人公を見分けられる。

主人公の行動パターンはおおむね把握したので先回りだつて余裕だが、まあ、前述の通り主人公にはコアなファンが点在しているので、他の子につかまっている事も多い。

たとえばクラウディアと同じクラスのギャル『眞鍋 莉緒菜（まなべ りおな）』とか。彼女は手ごわい。おまけに人柄も申し分ないので、ライバルなのに嫌いになれない……。

……とにかく、クラウディアにとつては、主人公との一回一回の接触が貴重なのである。チャンスがあるのであら、絶対に無駄にできない。

だから、嫌な噂を聞いてしまったからと言つて怖気づいて『今日は話しかけないでおこう』なんて事はできない。もつたいなさすぎる！

……だが、クラウディアは考える。

『いざ主人公に会つたところで、自分は眞偽を確かめられるのだろうか？』と。

『主人公の口から、笑顔で恋人の話なんかされたら、自分は死んでしまう気がする』と。

しかし、そんな事を考へてゐるうちに主人公がやつてきた。

主人公、ひとつ前の時間はC組で授業、その次は空きである。

つまり比較的余裕がある。そして職員室に戻る時、主人公は高確率でこの道を通り予想的中。ライバルの姿もなし。行くしかない！

「あくまで偶然を装う」

先生！」

〈主人公〉

「橘さん！」

主人公、笑顔で振り向く。クラウディアは、これだけで胸がきゅんとなる。

「穩やかに。もちろん、知つていて聞いている」

今、お時間大丈夫ですか？』

〈主人公〉

「もちろん！ どうしたの？」

SE³ ..クラウディアが荷物を差し出す音

〔頭から最後まで流す〕

〔その後セリフ〕

「〔にこから ※マークまで、声が弾む〕

週末お借りした本と、そのお礼です。

お貸しいただきましてありがとうございます。すごく面白かつたです」

〈主人公〉

「もう読んだの？ 早いね！ お菓子もありがとうございます。今日は何かな？ 開けてもいい？」

「お菓子は、ブラウニーです。先生、食べたいっておっしゃっていたので……」※

〈主人公〉

「覚えててくれたんだ……嬉しい！ 大切に食べるね。

……でも、なんだか申し訳ないなあ。いつもお礼をいただいている気がする。

でも橘さんの作るお菓子おいしいから絶対欲しいし」

「〔にこやかに〕

そんな事おっしゃらないで下さい。

それだけ先生が、いつも親切にして下さってるという事です。

私こそ、食べていただけで嬉しいです。

【しれっと嘘をつく】

いつも作り過ぎちゃいますから」

主人公、喜びつつも、クラウディアの気持ちには全く気付いていない。

『橘さんは、お菓子作りが好きだと言っていた。だから、いつも余った分をプレゼントしてくれているのだろう……』と、さっそく鈍感を発揮している。

もちろんクラウディアは、主人公のために作っている。

ちなみに残りは、掃除のおばさんや警備員さんにあげている。

クラウディアは相手が年上すぎれば、緊張せずに話せる。

なので、校内のおじさんとおばさん職員とは仲が良い。逆に言えば、いまだに友達らしい友達はないのだが。

〈主人公〉

「最初にいたたいたのは夏だつたつけ。

あれからわたし、すっかり橘さんのお菓子のファンかも」

「ふふ。ありがとうございます。」

最初に食べていただいたのは七月でしたから。もう半年くらい経つんですね。
【少し間をあけてから。思い出すと、とても幸せな気持ちになる】

私があの時のすごく嬉しかったんですよ。

先生が『プール休んでもいい』って言つてくれて。

それからあの後。先生はクラスの子に『女の子同士でも、相手が嫌がつてたらセクハラだよ』って、注意してくれましたよね。

【思い出すだけで胸がじーんとしてしまう】

あれも、とても嬉しかったです。

【声が一段階明るくなる】

おかげで、何か言われる事もすっかりなくなりました。

本当にありがとうございます」

〈主人公〉

「本当? でも、これからも何かあつたら言つてね。いつでも力になるから」

【主人公が心配してくれるのがとても嬉しい】

大丈夫ですよ。今はかばつてくれる子もいるので

クラウディア、当時、主人公がクラスメートに注意してくれたのはとても嬉しかった。だが、主人公がこんな指摘をした事で、生徒達から煙たがられてしまうのではないか？と、不安でもあつた。

しかし、クラウディアの予想に反して、周囲は意外にも素直だつた。
クラスは『まあ確かに先生の言う通りだよね』『悪気なくやつてたからこそ、これからは気を付けよう』という雰囲気になり、同性間でも無許可に身体を触つたり、体型についてコメントしたりする事は、以前よりだいぶ減つたようになる。
優しい世界でよかつた。基本的にみんな育ちがいいのである。

なお、これには、主人公の人柄もあるが、前述の『真鍋 莉緒菜』が、主人公の言葉に賛同したのが大きい。

莉緒菜はクラスの中心人物で、明るくリーダーシップがあり、何事もそつなくこなす。そんな彼女が主人公の意見に強く同意した事で、言葉はより力を得たのだつた。

だが、クラウディアと莉緒菜は、別段親しい訳ではない。
莉緒菜がああも強く賛同した理由は、他のところにある。
それはもちろん……。

〈主人公〉

「眞鍋さん？」

「はい。眞鍋（まなべ）さん、とても親切で。

今の先生みたいに『困った事があつたらすぐに言って』って言つてくれるんです」

〈主人公〉

「わあ、さすが。眞鍋さんは頼りになるよね。さすがクラス委員長って感じ」

そう。莉緒菜も主人公に本気なのである。

主人公の事が好きな人は他にも数名いるが、二番目に本気度が高いのは彼女だろう。
なお、一番はもちろんクラウディア自身（クラウディア調べ）である。

当然クラウディアも、莉緒菜の気持ちは前々から把握している。

彼女がクラス委員長になつたのだつて、主人公にアピールするためだ。

なのでクラウディアは『それは、先生にいいところを見せたいからですよ。眞鍋さんは
先生の事が大好きですから』と言いたくなるが、言わない。

いくらライバルだからと言つて、勝手に気持ちを暴露するような事はできない。

しかし肝心の主人公には、モテているという自覚が全くない。
自己評価が低いのか何なのか、かなり露骨なアプローチをされても『なんだか距離
が近い気がするけど気のせいだろう』『この人はきっと、誰にでもそうするのだろう』と
流してしまうのである。

というか、好かれている自覚なく優しくするので、優しさに容赦がない。
相手が勘違いしてしまうような事を、平氣でする。

さらに、相手が必要以上に距離を縮めてきている事に気づかないので『本気で好かれて
いるらしいので、距離を置こう』という発想もない。
結果、相手も『もしかしたら脈があるのかも』などと思つてしまい、どんどん深みには
まつていて。……というか、クラウディアがそうなのだ。

なのでクラウディアは、主人公が莉緒菜を褒めると苦しくなる。

だが、褒めるのは当然である。莉緒菜は正しい事をしているし、もし莉緒菜を褒めない
主人公がいたら、それは偽物だ……。とすら感じる。主人公はこれでいいのだ。
頭ではわかっている。なのに、胸が苦しくなる事が多すぎる。

これが恋なら、構造に欠陥がありすぎる。と感じる。

〈主人公〉

「もはや眞鍋さんの方が先生っぽいね。威厳がないからなあ、わたし」

ほら、また主人公が見当違いの自虐を始めた。

確かに主人公は威厳に欠けるかもしれない。だが莉緒菜は、主人公が先生として正しい事をしたから、主人公のようになりたくて自分も『先生っぽい行動』をしているのだ。

クラウディアの言う事ではないが、主人公は、少しは莉緒菜の気持ちを理解した方がいい……。

〔思わずムキになる〕

何をおっしゃるんですか。確かに彼女は頼りになる方ですけど。

先生だつてすごく人気があると思います。みんなが先生の事を好きです」

〈主人公〉

「そう？ そうだつたら嬉しいけど……」

「【勇気を出して、せめて好意だけでも伝えようとする】

少なくとも、私は……」

〈莉緒菜〉

「せんせー！ ちょっといいー？ 準備室の鍵持つてんの先生だよねー？
あと、すっこい聞きたい事あるんだけどー！」

そこへ、莉緒菜がやってくる。

おそらく莉緒菜も、主人公の恋人の有無を確かめに来たのだろう。

クラウディアは断言できる。『準備室の鍵の件は、間違いなく口実だ』と。

クラウディア『眞鍋さんくらい明るくて正直だつたら、先生の恋人の件も、さらつと聞
けるんだろうな』と思う。そして莉緒菜と自分を比べてしまい、なんだか落ち込む。
渡すものも渡したし、今日はもうここで退散しよう……。と考える。

「【残念な気持ちを抑えながら】

……噂をすればですね。じゃあ私はこれで

〈主人公〉

「待つて！」

クラウディア、主人公に呼び止められた事が嬉しい。

莉緒菜よりも自分を優先してもらっているような気分になる。

【期待した様子で】

えっ？」

〈主人公〉

「実はね。今日わたしも受け取ってほしいものがあるのです」

主人公、抱えていた授業道具から、一枚の封筒を取り出し、クラウディアに差し出す。

S E 4 ..主人公が手紙を差し出す音

〔頭から流す〕

〔0—4秒ほどまで流してセリフ〕

〔期待して声が震える〕

もしかして。お返事、書いてくれたんですか。
ていうか、お手紙、読んでくれてたんですか。私でつきり……」

〈主人公〉

「そうです！　ごめんね、すぐにお返事できなくて」

クラウディア『お返事はもらえないものだと思つていました』と言いつるがやめる。

確かに、手紙の返事をもらえないのはいいと思つていた。
『先生はまめなタイプだからもしかしたら……』と期待したが、やはり約束していた訳じやない。だから仕方ないと。

そう自分を納得させようとしていたが、いざもらえると、こんなに嬉しいものなのか。
嬉しくて泣きそうになる。

主人公と物の貸し借りをした事はあるが、何かをもらうのは初めてである。
胸がいっぱいになつて、喉が詰まる。うまく話せない。

【感激して必死で首を振る】

ううん、ううん。

【返事が欲しくてしようがなかつたくせに、手紙が本題だつたくせに、嘘をつく】

そんなのいいんです。あれはお菓子のおまけみたいなものですし。
お返事いただけるなんて思つていなかつたので。

【泣きそう】

嬉しいです……』

〈主人公〉

「えへへ。もつと早く渡したかつたんだけど。

恥ずかしい事にわたし、全然手紙を書く習慣がなくつてね。

昨日買いに行つてたんだ』

クラウディア、驚く。

とても直接は聞けないだろうと思つていた事を、あっさり質問してしまう。

【あっさり聞いてしまう】

先生。昨日デートだつたのに、私に送るレターセット、探してくれたんですか?』

〈主人公〉

「えっ？ デートって何？」

【思わず早口になる】

え？ だつてクラスの子が言つてました。日曜日先生がデートしてたつて

〈主人公〉

「なんでそんな噂が！ 残念だけど完全に一人行動だよ。

レターセツト買った後はオタクショップ巡りしかしていないよ」

主人公、なぜか誤解されたくない。聞かれてもいない事までしゃべってしまう。
別に自分に恋人がいても、何も悪い事ではない。

なのに、なぜかクラウディアだけには誤解されたくないのである。
その理由はわからない。主人公は自分の感情にも鈍いのである。

「でも、中島（なかじま）のモールで『背の高い金髪の男の人と一緒に歩いてるのを見た』
つて言つてる子がいました」

主人公、ここで合点がいく。そういうば、思い当たる節が一つだけあつた。

これならはつきり誤解を解けると感じ、ホツとする。

〈主人公〉

「ああ！ それ、道だね！ 道を教えてたの。海外の方だつたから。

話を聞いたら、探しててるお店は近かつたから、送つていく事にしたんだよ。だから一緒に歩いてるよう見えたんだと思う。ていうか一緒に歩いたし」

クラウディア、思わぬ事実に腰が抜けそうになる。

『道案内？ 道案内？ ええーっ？ 私が死ぬほど落ち込んだこの数時間は一体何だつたの？』と思う。

〔安心するあまり、ヘナヘナと力が抜ける〕

道案内……。

〔少し間をあけてから。呆然としている〕

なんだ……そだつたんですね。私てつきり……」

〈主人公〉

「恋人がいると思つた？ いません！ 先生は生徒に嘘をつけません！」

主人公、はつきりと否定する。

だが、のちにこの『先生は生徒に嘘をつかない』という言葉は、主人公の首を絞める事になる。

だが、主人公はまだそれを知らない。自分は絶対に生徒に嘘をつかないし、そもそも嘘をつかなくてはならない場面にも遭遇しないと、本気で思っている。

【すっかり気が抜けている】

そっかあ……。

【少し間をあけてから。主人公の言葉に嬉しくなる】

ふふ。そうですよね。信じます。

先生は私達に嘘をつかない。わかつてます」

〈主人公〉

「昨日の用事は主にこれだもん。

あそここのショッピングモールなら、可愛い雑貨屋さんあるよなって思つたから!」

「嬉しくて、ホツとして、泣きそう」

そつか。これを買うために、出かけられてたんですね。嬉しいです……」

〈主人公〉

「そうです！ これ、すっごくかわいくない？ 橘さんっぽいなあって思つたんだ！」

クラウディア、ホツとともに、主人公が自分のために休日を費やして探し物をしてくれていたという事実に、たまらなく嬉しくなる。

莉緒菜の存在を忘れた訳ではないが、もつと話していくくなる。

〔嬉しくて声が上する〕

「はい。私もすごく可愛いデザインだと……」

莉緒菜のセリフ、クラウディアの声とかぶせる。

〈莉緒菜〉

「ねー。せんせー？」

しかし、ここで莉緒菜がもう一度主人公を呼ぶ。

主人公も莉緒菜の方を見てしまい、クラウディアはまた苦しくなる。

一方莉緒菜、実は二人の会話に聞き耳を立てていた。

だから主人公に恋人がない事はわかつたし、当然準備室の鍵の件は口実なので、実はもう用事はない。

だが、二人が盛り上がっているのが悔しくて、つい割り込んでしまったのである。

〈主人公〉

「おつと。ごめんね。そろそろ行かなくちゃ。

お菓子とお手紙ありがとう！　あとでじっくり読んで、食べるね」

「あ、はい。お時間ありがとうございました……！」

クラウディア、『今、すごくいいところなのに……』と悔しくなる。

莉緒菜の存在を、鬱陶しく感じる。

だが、返事がもらえた以上、伝えたい事が増えた。

『ここで会話を終えてはならない！　私はまだ伝えたいことがある！』と思う。
歩き出そうとする主人公に、いつもより大きな声で、もう一度話しかける。

SE5 ..主人公の足音

【トラック1の**SE2**と同じ音】

【途中から最後まで流す】

【20—26秒ほどまで流し、**SE**が終わってからセリフ】

「あの！」

主人公、立ち止まる。その瞬間、クラウディアと目が合い、ドキっとする。

『あれ？ 橘さんって、改めて見ると、すっごいかわいいな？ いや、美少女だって事は、ずっと前から知つてたはずなんだけど……』と思う。

だが、なぜそう思うのかはわからない。

【ありつたけの勇気を出す】

これ、読んだら。またお返事書いてもいいですか？』

主人公、自分の気持ちはよくわからないが、ひとまず明るく返事をする。
クラウディアが美少女なのは事実なのだから、かわいいと思うは何も問題ないはずだ

……。と考える。

〈主人公〉

「もちろん。待つてます！」

「はい！ 書きます、絶対。先生。ありがとうございます！」

S E 6 ..主人公の足音

【トラック1のS E 2、トラック2のS E 5と同じ音】

〔頭から流す〕

〔本来の音よりもスピードを少しを早める〕

〔0—5秒ほどまで流してフェードアウトする〕

クラウディア、去つて行く主人公を見送る。

途中、主人公が振り向いて手を振つて嬉しくなる。

だが、主人公の心境が変化している事には、当然気づかない。

このままフードアウトして終了。